



須藤一郎と
世界一小さい美術館
ものがたり

菅原洋《雪中》1973年

2020年
10月10日(土) - 12月6日(日)

多摩美術大学美術館 

協力 すどう美術館

Tama Art University Museum

Anniversary

【お願い】

新型コロナウイルスの拡大・収束状況により、イベントの内容が変更となる場合がございます。
随時当館のHPにてお知らせいたしますのでご確認ください。またはお電話かメールにてお問い合わせください。

◆開催趣旨◆

このたび、多摩美術大学美術館では「須藤一郎と世界一小さい美術館ものがたり」展を開催いたします。

須藤一郎（1936 -）は画家 菅創吉作品との出会いが天啓となり現代美術に目覚めたコレクターです。40代後半から蒐集を開始し、菅創吉をはじめ猪熊弦一郎、難波田龍起、大沢昌助、星崎孝之助、若林奮らの作品を精力的にコレクションに加えてゆきました。その珠玉のコレクションもさることながら、このコレクターを物語る側面として一人の会社員として職務を全うしつつ、その生業で得た糧をもとに作品を蒐集したことは特筆すべきでしょう。

加えて須藤の活動を際立たせている事象があります。手元に満ちてきた作品群は抗し難い力で心を引き込み、その魅力を分かち合う場として自宅を美術館として開放したのです。1990年の「すどう美術館」誕生です。本展タイトルにある「世界一小さい美術館」とは東京・町田に構えた個人宅であり公開施設となった「すどう美術館」の別称として須藤が与えたもので、この小さな美術館は「サラリーマンが美術館を開いた」とマスコミでも話題となっていきました。運営は、妻・紀子（2020年1月逝去）との二人三脚。共に蒐集・公開を精力的に展開させていきます。やがて須藤の思いは若手画家の公募展や留学制度、アーティスト・イン・レジデンス等の作家支援、そして東日本大震災の被災地等で継続する芸術による社会活動へと拡充し、作家や支援者そして行政をも動かす活動となっていきました。作品蒐集や美術館の域を超えた様々な活動を経て、須藤は「絵よりもっと大事なものは人間との関係」と言います。「すどう美術館」開館から今年で30年、須藤そして「すどう美術館」の営みは作品・作家との共振であり芸術の力を信じた心の旅だったと言えるでしょう。館長たる須藤が62歳で会社退職後に銀座へ進出したのち、神奈川・小田原を拠点にする今もそれは続いています。

本展はひとりのコレクターが妻と共に歩み、作品と作家そして多くの人々や社会と響き合ってきた姿の軌跡です。須藤が「真剣勝負」で私財を投じたコレクションと同時にアートに込めた信念の活動をお伝えしたく存じます。

この困難の時代、人の心を動かし人を繋ぐ芸術の力、そして芸術との出会いによって紡がれた豊かな「ものがたり」をお届けできましたらそれに勝る喜びはありません。本展につきまして、貴メディアにて是非お取り上げ頂けます様、お願い申し上げます。

【Series：コレクターズ/Collectors】

蒐集（しゅうしゅう）の域を超えてアートとの関わりを生み、自らの志を波動として周囲へ影響を与えるような「コレクター（＝蒐集家）」たちがいます。当館では、作家や作品と一体となってアートシーンを描き出すコレクターの存在を取り上げる「コレクターズ」シリーズを立ち上げます。作家を支えつつ社会へアートの息吹を送る彼/彼女らは、将来アートシーンで活躍するであろう美術大学の学生にとっても非常に重要な存在です。本シリーズでは、作品蒐集の背景にあるコレクターのまなざしや個人のライフストーリーを辿りつつも、蒐集という行為そのものが社会をより充実させるための営みであると捉えることで、「社会におけるコレクターが果たす役割」を再考します。本展はその第1回目となるものです。

◆開催概要◆

展覧会名 須藤一郎と世界一小さい美術館ものがたり

会期 2020年10月10日（土）－12月6日（日）

会場 多摩美術大学美術館 〒206-0033 東京都多摩市落合1-33-1

交通 多摩センター駅 徒歩7分（京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール）

開館時間 10:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 火曜日（但し、11月3日は開館、11月4日は休館）

入館料 一般300円（200円） ※（ ）は20名以上の団体料金 ※障がい者および付添者、学生以下は無料

主催 多摩美術大学美術館

協力 すどう美術館

【お問い合わせ】

担当学芸員：淵田雄

渡辺真弓

museum@tamabi.ac.jp

電話：042-357-1251

FAX：042-357-1252

2 / 6

◆ 関連イベント ◆

須藤一郎は作品展示のみならず様々な芸術形態を複合させることも、美術館活動の重要な柱であると捉えていました。「すどう美術館」の活動は、展覧会から講演会・講座・シンポジウム等からコンサート・演劇・朗読・落語会へと広がりを見せ、東日本復興支援へと展開していきます。人間と人間のひびきあいの瞬間を生んできた須藤のアートコラボレーションの活動を本展で再現し、オンライン動画にてより遠くへ、そして多くの方々へお届けします。

※イベントの詳細は随時発表いたしますので、当館 HP および Twitter をご覧ください。動画配信は11月初旬を予定。

◆ オンライン・イベント内容 ◆

・対談「まず、やってみよう。」

すどう美術館館長 須藤一郎 × 美術批評家 仙仁司



開館以前から30年以上に渡り、「すどう美術館」の活動を導き、支えてきた美術批評家の仙仁司（元多摩美術大学美術館学芸員）。仙仁と須藤一郎の長きに渡る交友で初となる対談が実現します。須藤と妻・紀子（すどう美術館副館長）の菅創吉との出会いや作家との共鳴、そして多くの人々の賛同を得てきた須藤夫妻の目指したこと等、活動と志のヒストリーを開示します。

・落語「すどう美術館コレクションと一緒に観て聴く落語会」

出演／落語家 立川志らら



「すどう美術館」が銀座にあった頃、立川談志の孫弟子四人で「四人の真剣勝負」という落語会が定期的に行われてきました。「すどう美術館」が小田原に移転してからも、立川志ららによって落語会は続けられました。

須藤と長い付き合いがある志ららによる落語会では、すどう美術館館長の新たな一面が語られるかもしれません。

・朗読「聴く絵画鑑賞～絵画から生まれた物語～」

出演／朗読 御幸菜穂子



「すどう美術館」のコレクションのうち星崎孝之助《沙漠の花》、小山田二郎《舞踏》からインスピレーションを受けて、語り手である御幸菜穂子自身が「言葉」によって「物語」を紡ぎます。彼女の声からは作品と誠実に向き合い、多くの時間を重ねたことで生まれた言葉が聞こえてきます。芸術の鑑賞は見る者に委ねられた体験でありながら、同時に、鑑賞者の間にも作品を媒介とした多くの「対話」が生まれるでしょう。

・朗読ノ演奏「汚れていて美しい絵物語」

出演／朗読 泉田洋子／ヴァイオリン 大鹿由希



須藤一郎は、表面的な美やきれいごとではなく、その人の生き方や心が現れているもの一本展出品作家である河野扶の言葉を借りるならば「汚れていて美しい絵画」こそ、人の心を動かすのだと考えていました。詩・絵画・音楽という異なる芸術の形を織り合わせて広がる芸術の風景。絵画世界に触発する泉田洋子の声、そして大鹿由希のヴァイオリンが奏でる音楽の響きをお楽しみください。

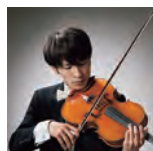
・コンサート「絵の森のコンサート」

～私たちのげんきアート・プロジェクト～

出演／ヴァイオリン 大鹿由希／ヴァイオリン 甲斐史子／クラシックギター 橋爪晋平

ヴィオラ 渡辺康仁／コントラバス 佐藤洋嗣

2011年3月11日東日本大震災の後、「すどう美術館」が事務局となり、画家・演奏家・ボランティアと一緒に「東日本げんきアートプロジェクト（GAPPE）」を立ち上げました。美術・音楽で何かできることはないか、被災地へ芸術活動を通じて元気を届けたいという思いから、美術家・音楽家たちが集まりました。コンサート会場はいつもたくさんの絵で飾られ、失われた街の風景に生まれた小さな森のようでした。これまで行ってきた大鹿由希・橋爪晋平に新たなメンバーを迎え、5人の楽器が奏でる音楽と絵画のコラボレーションをお届けします。



◆ 展覧会の構成 ◆

第1章 邂逅 — 菅創吉との出会い

1982年春のこと、須藤は妻紀子と静岡県伊豆の池田20世紀美術館を訪れた。開催されていた「菅創吉の世界」展での出会いは偶然を突き抜けた運命と言うべきだろう。菅作品と向き合った時の印象を須藤は「絵は抽象に近く、具象ばかり見ていた目にはあまりにも異質で一瞬とまどいを感じた」と記す。だが、続いて「みているうちに一見洪くて地味な色調でありながら、決して暗くなく、温かみやユーモアもあり、作家の人間味がにじみ出ている深い味わいを覚えた」と刻々と思いは変容してゆく。そして「どンドン絵の世界にひきこまれ」その場で購入を申し出、《壺中》を求めた。そのことを「衝動買い」、と須藤は言う。堰を切ったような「実行力」は、菅の作品世界と出会ったことで須藤の中で忽然と育った芸術的体験が冷静の許容値を超えて「衝撃」となった具体的な証だろう。以降、須藤の「実行力」は自身の生き方すら変えていったことは本書テキストに須藤が記す通りである。それは菅が逝去した数日後であったという。

この章では須藤が手元に置く菅創吉作品を提示する。美術評論家米倉守が記した「静けさに聴き入る」ような菅の世界をご覧いただきつつ、須藤に訪れた「衝動」を押し量っていただければと思う。

第2章 蒐集 — 進化するコレクション

須藤が菅創吉と出会ったのが46歳のこと。菅の作品を求めることから始まったコレクション活動は次第に他の作家へと広がってゆく。手元に置く作品を精力的に増やしていったのが、会社を定年退職するまでの頃だということになる。期間は10数年ということになる。およそ300点を蔵品としていった訳だが、そうなるとうちでも毎月必ず作品を買う計算としなければならない。その間1990年に開設したすどう美術館長に着任しつつも、須藤の本業はサラリーマンである。自負する「モーレツ社員」時代も長く、夜半過ぎの帰宅も当たり前という日常でのコレクションであった。ここで言及すべきは妻紀子である。紀子は副館長として美術館運営のパートナーでありつつ、コレクションにとっても欠かせざる存在だった。須藤曰く、気に入った作品については「意見が一致した」という。充実したコレクション形成を推進し、資金投入をする合意があったことになる。また作品購入の心境を「真剣勝負の衝動買い」と須藤は言う。「そうでなければ、きっと幸福の青い鳥を逃してしまい、あとで悔やむことになってしまう」と続く言葉は、実行のコレクターから発せられるだけに強く響く。

本章は、須藤一郎が「真剣勝負」の末、手中にしたコレクションから猪熊弦一郎、河野扶、難波田龍起、星崎孝之助、山口敏郎、若林奮ら18名の作家を紹介する、コレクションの粋である。

第3章 支援 — 若き作家達へ

すどう美術館は30歳程までを対象とした公募展「若き画家たちからのメッセージ」展を開催。1996年を初回として2014年迄、通算17回で気鋭の作家35名に「買い上げ賞」と「個展開催の副賞」を授与してきた。発端は「若い作家にささやかながら展示スペースを提供し、支援したい」ことにあると、須藤は控えめに語る。だが、その開催は上記期間2007年を除く毎年だ。継続を繋いだエネルギーは作家即ち人間へ向ける思いであり、「人に感動をあたえる作品を作るには、人間としての豊かさや幅の広さが必要であり、そのためには、日ごろの生き方が重要」という須藤の言葉が象徴的だろう。「若き画家たちからのメッセージ」展における人間との向き合いは、審査する須藤が応募者全てを面接する時間から始まっている。それは須藤の信念「アートはアートだけが一人歩きするものではなく、創る人、見る人、それを繋ぐ私たちの人間関係の中に存在する」の実行だ。主催者の姿勢は若き作家と響き合い、多くは今もまだ鳴り止むことはない。

本章では「若き画家たちからのメッセージ」展歴代受賞者を紹介すると共に、受賞作家から寄せられたメッセージを展示する。受賞当時の彼らの姿が作品にあり、作家として経験積み人生を重ねた彼らの制作姿勢やポリシーが言葉に窺っている。

第4章 結集 — アーティスト・イン・レジデンス

すどう美術館の視野は世界へ向かっていった。実際に米国「ART SANTA FE」やスペイン「PURO ARTE in VIGO」ドイツ「Art Karlsruhe」等の国際アートフェアへの出品だけでなく、スペインノハ市主催のレジデンスやスロベニアのレジデンスにも招待作家を派遣している。海外アート事情や多国籍作家のレジデンスがポピュラーである世界の事実を須藤は経験上よく知っていたのだ。そして「日本でも芸術の振興とアーティストの育成、支援の観点からこういうイベントを本格的に実施すべき」と考え、言行一致へと動く。美術館活動の拠点となっていた神奈川県小田原市で行った「西湘地区アーティスト・イン・レジデンス」、通称「ARIO」の開催である。行政へ働きかけ、実行委員会を設置して開催へと漕ぎ着けたのが2011年、後に2013年、2015年、2018年（箱根仙石原にて開催）と続き、スペイン、イタリア、スロベニア、米国、ドイツ、オーストリア、スイス、クロアチア、スウェーデンそして日本の招待作家達総計40名以上が交流し制作を行い、制作の公開、時に近隣の小学校等でワークショップを行った。アーティスト達は子供達と一緒に絵具だらけになって巨大な作品を仕上げたと言う。また各回約10日の期間中には、シンポジウムやコンサート、映画会などが企画され、「ARIO」はさながら国際的な芸術の祭典であった。本章で紹介するのは実際にレジデンスで制作された作品群である。これらは多国籍な作家達が芸術を縁にして地域と人間と響き交流した証なのだ。

◆作家紹介◆

須藤一郎 (すどう・いちろう)



〈略歴〉

1936年東京生まれ。東京大学法学部卒。

サラリーマンとして勤務しながら現代美術の蒐集をする。

1990年10月より町田の自宅を開放し、妻・紀子と共に「すどう美術館」を開館（後に銀座、小田原へ移転）。同館館長。

現在は、ギャラリー等での展示やアーティスト支援活動などを行っている。

〈略年表〉

- 1936年 2月27日、須藤一郎、東京都墨田区（旧向島区）に生まれる。
- 1960年 東京大学法学部第2類卒業。
第一生命保険相互会社（現株式会社）に入社。
- 1982年5月 一郎・紀子、池田20世紀美術館で行われていた「菅創吉の世界」展で衝撃を受け、作品《壺中》を購入。菅は直前に77歳で逝去したため、本人には会えず。その後、菅作品の蒐集を中心に他の作家の作品蒐集にも力を入れるようになる。
- 1990年10月 東京都町田市の自宅を開放し「すどう美術館」を開設（通称「世界一小さい美術館」）。長年住んでいた自宅の一部を改装し、リビングルーム、六畳の和室、廊下を展示スペースとして使用する。2ヵ月ごとに収集作品を掛け替えて展示替えを行う。やがてコレクション以外の企画展、講演会や講座の開設、館外での活動などが加わる。
- 1992年3月 一郎、館長に就任。妻・紀子は副館長に就任。
- 1996年1月 一郎、博物館学芸員の資格を取得（玉川大学文学部通信教育科入学）。
- 1996年1月 公募展「若き画家たちからのメッセージ」展を開催。その後20年継続する。（第1回～第17回）応募のあった画家達全員に面接・審査した。
- 1996年3月 1996年3月3日、「-いのちのつぶやきが聞こえる-菅創吉」展がNHK「日曜美術館」で40分にわたり特集される。放映後2か月の会期中、全国から2,000人を超す来館者を迎える。
- 1998年3月 町田から東京都銀座6丁目へ「すどう美術館」を移設。一郎が38年余勤めた会社を同年6月退職することになり、「清水の舞台から飛び降りる覚悟で銀座進出を決めたもの」。企画展、貸しギャラリーの運営のほか、定期的にコンサート、演劇、落語会などを行う。
- 2001年1月 一郎エッセイ集『世界一小さい美術館ものがたり』刊行。以後、7版まで刊行され累計刷数10,000冊ほど。
- 2002年3月 收藏品を持って出かける「出前美術館」始動。富山県福野町（現南砺市）、石川県金沢市、新潟県柏崎市、岩手県大槌町、茨城県つくば市、神奈川県大井町、南足柄市、横浜市など。空き店舗や文化センター、美術館、ギャラリー、障害者施設など様々な施設へ足を運ぶ。
- 2003年2月 すどう美術館が銀座に移設して5周年を迎える。記念事業として、「銀座開設5周年記念チャリティオークション」展、「銀座開設5周年記念コレクション」展開催。デンマークコペンハーゲンへの美術旅行実施。海外短期留学制度を制定する。7月 銀座から小田原市へ美術館を移設。
- 2008年5月 神奈川県秦野市を中心とする「丹沢アートフェスティバル」に初参加。以後毎年参加。
- 2011年5月 プロジェクト「東日本げんきアートプロジェクト」（略称GAPPE）発足。2011年3月11日に起きた東日本大震災についての支援を目的に設立。美術家、音楽家、ボランティアとともに活動を開始し、2017年までつづく。
- 11月 「第1回 西湘地区アーティストインレジデンス（ARIO）」実施（小田原）。海外6名、国内6名のアーティストを招待。
- 2013年12月 「第2回 西湘地区アーティストインレジデンス（ARIO）」を小田原で開催。海外5名、国内5名のアーティストを招待。
- 2015年11月 「第3回 西湘地区アーティストインレジデンス（ARIO）」実施（小田原）。海外6名、国内6名のアーティストを招待。
- 2016年4月 すどう美術館の活動方針を転換。拠点を持つ展示を終了し、外部での活動を中心とする。
- 2018年7月 「第4回 西湘地区アーティストインレジデンス（ARIO）」実施。（神奈川県箱根仙石原）。



美術館外観 町田



妻・紀子と須藤一郎

1990



ARIO 制作風景

2011



東日本プロジェクト大槌町コンサート 2012

画像請求書

多摩美術大学美術館 宛

FAX 042-357-1252 E-mail museum@tamabi.ac.jp

◆ 提供可能画像 ◆

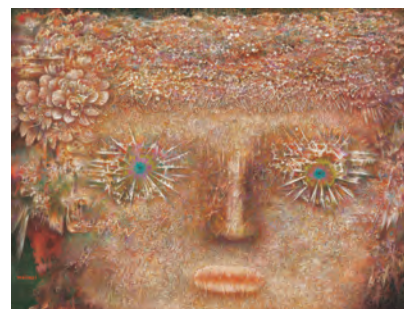
広報用図版として8点をご用意しております。画像掲載ご希望のかたは必要事項をご記入の上、画像番号に○をつけて、FAX またはメールにてお送りください。



1. 菅創吉《壺中》1975年



2. 小山田二郎《舞踏》1987年



3. 星崎孝之助《沙漠の花》1990年



4. 田口雅巳《極楽繁盛図》1988年



5. 谷川晃一《ナナの音楽》1989年



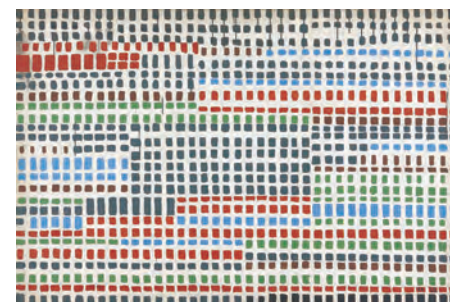
6. 若林奮《BLACK COTTON No.7》1989年



7. 河野扶《閉じる(2)》1998年



8. 菅創吉《赤いセーター》1979年



9. 大沢昌助《点の配列》1987年

全てすどう美術館蔵
photo credit:

媒体名：

発売・掲載・放映日：

御社名（ご担当者名）：

Eメールアドレス：

ご連絡先（電話・E-mail）：

諸注意

- ①掲載時は作家名、タイトル、コピーライト等を必ず表記ください。トリミング、文字載せはお控えください。
- ②記事をご掲載いただく場合には、情報確認のため校正原稿をお送りください。
- ③掲載誌、HPリンク等をお送りいただけますと幸いです。

多摩美術大学美術館

[お問い合わせ]

担当学芸員：淵田雄

渡辺真弓

museum@tamabi.ac.jp

電話：042-357-1251

FAX：042-357-1252

<http://www.tamabi.ac.jp/museum/>

